

聞き書き 石川県のキリスト教保育を担った人々(1)

付：J K U年報1－5号にみる北陸地方の記録

児 玉 衣 子

北陸地方のキリスト教保育史を知ろうとするなら、現在のところ、各幼稚園の記念誌および北陸学院の関係記念誌に目を通したり、あるいは古いところではキリスト教保育連盟から復刻されたJ K U年報に目を通す以外に方法はない。しかし、分量的にも年代的にもまだまだ実践内容を浮かび上がらせるだけには至っていないのが実状である。そこでまずは、現在は引退されたがご健在の先輩保育者の方々に当時の実践内容やその背景を伺うことを始めたのが「聞き書き 北陸地方のキリスト教保育史 (1)福井県」(本学紀要32号、2000年)であった。

本稿は、その継続として石川県、中でも金沢市に在住の先輩保育者の方々からの聞き書きである。今回伺った5人のお話しの内、3園と1校については既にある。また、お一人については北陸地方で保育にあたられた後、埼玉県志木市に幼稚園を開設、園長として30数年を過ごされた後、惜しまれながら2001年3月に閉園されたので、その幼稚園についても伺った。

主イエス・キリストに導かれて幼子達と共に保育の日々を過ごされた方々のお話しは、昭和初期から平成13年までに至る。中には筆者の怠慢のため聞き取りから数年経過している方々もおられる。お詫びして本稿をもって報告させていただく。なお、順序は採録の順にした。

また、わが国のキリスト教保育実践に関する貴重な記録である Japan Kindergarten Union の年報についても、その中の北陸地方に関する部分がまだ殆ど知られていない状況にあるので、今回から訳出をし始めた。今回は1号から5号までの関連記事を取り上げた。少しずつでも、当地における実践の内容を明らかにしたいと考えている。

1、吉村^{くろむら}鋪子^{ふし}さん 元川上幼稚園主任

1920年生。現在、兵庫県明石市在住。

採話：1999年5月9日

ご著書『金沢よ さようなら (八十才からはおまけの人生)』北国新聞社刊、2000。に戦争中の保育について語っておられるので、重複する部分は省いた。

子ども時代の思い出

自宅(十三間町中丁)のすぐ近くに救世軍の教会があり、そこで若いご夫婦が牧会をしておられた。姉がそこへ行くのを追って自分も出入りする内に、その夫人がとても優しい美しい人で可愛が

児 玉 衣 子

られて、自分もその夫人が好きで入り浸った。3, 4才の頃である。しかし、ある日、その教会の扉に斜めに木が打ちつけられて閉じられていた。悲しかった。今から思うと思想統制が始まっており救世軍は「軍」がつくので危険思想視されたのではないだろうか。

小学校4年生の頃から本多町英和幼稚園（1915、大正4年より北陸女学校附属第一幼稚園と改称。しかし当時なお英和幼稚園で通っていたのかと思われる）でライザー先生（Miss Irine Reiser, 大正10年に金沢に赴任）の開かれていた木曜学校に通い始め、先生から聖書と英語を学んだ。6年生の時、先生が木曜学校の6年女子生徒全員に北陸女学校受験を勧められ、受験するといった全員と握手をして回られた。その場にいた全員だった。公立女学校受験と思っていた両親を説得し、公立女学校受験を勧めて下さった担任にお断りをした（当時、先生の勧めに従わないなどということはとんでもないことで、大変な緊張をしてお断りに行った）。当時は公立の試験の方が早く、友達は早くに決まり、自分は試験もまだ、もし落ちたらどこにも行けないという不安と取り残されたような寂しさを経験した。そのようにして入った北陸女学校に、しかし、あの時約束した子は誰もいなかった。さらにライザー先生までも1学期だけで休暇（4年働くと1年の休暇）のため帰米されて、先生にも裏切られたような気がした。

昭和12年4月から昭和14年3月まで 東洋英和女学校保母師範科の思い出

授業では、キュックリヒ先生にフレーベルを学んだ。巧刀嘉子先生に実習全般のことを学んだ。巧刀先生には川上幼稚園時代にもお世話になった（後述）。高良とみ先生に児童心理学を学んだ。週一度青山学院へ行って、その日は一日青山学院で授業を受けた。（学生5, 6人でタクシーに乗せていった。当時、市電7銭、タクシーで30銭くらい）。旧約概論を渡辺善太先生に、新約概論を松本卓夫先生に、音楽・合唱を中田羽後先生に、賛美歌・頌詞を由木康先生に学んだ。

卒業と同時に川上幼稚園に就職。

就職した時（1939年4月）、主任の遠藤先生と自分と教師2名。カナダ婦人宣教師ミス コールバックが園長。子どもは60人位だった。1年目の終りに主任が休職され、自分が2年目から主任になった。

この頃既に国際情勢悪化に伴い、安全上、カナダ ミッション本部から日本にいる婦人宣教師達に帰国通達が出ていたという（川上幼稚園90周年記念誌による）。1941年3月リンゼー園長が帰国。ミッションからの送金も絶えた。幼稚園を広坂教会（現長町教会）に委譲し、幼稚園に理事制度を採りいれて教会がバックアップするという形で再発足した。この時、巧刀先生がわざわざ金沢まで来て新制度発足に助力して下さった。

1940年頃から外国人への敵対感情は強くなった。自分は園外でもカナダ人園長と話しながら歩くと、簡単な通訳の役もするし目立ったらしく、いつのまにか警察のブラックリストに載せられていたらしい。開戦の報が流れた時、一般の人は沸き立ったが自分はそれに気分的に乗れず、ある人から声を弾ませて「いよいよ始まったね」といわれた時「そうだね」と答えた。すると背中をどやさ

れて「非国民」といわれた。その人にどれほどの意味があったかわからないが自分の身邊にブラックリスト云々の様子を感じていたときだったのでこたえた。

物資の入手について

戦争前から既に紙は配給制度になっていた。配給制度になる前に紙は買えるだけ買って貯めておいたが、それはそれとして県庁の物資課に配給の申請に行き紙をもらった。その時、広坂幼稚園は無認可だったので紙配給の許可がないのでそちらにも廻し、また広坂教会は週報の紙にも困っていたので広坂教会にも紙をまわした。米は自宅分のみ配給で幼稚園への割り当てはなかった。野菜、魚も配給。ただし野菜、魚は店頭売りで個人的に買える分もあった。幼稚園で使うものでは糊は店頭で買えた。自転車は配給。さまざまな工場自体が軍需関係に変わっていたと思う。冬にはだるまストーブを使っていたのだが燃料に困り、卒業生宅などに薪を頼みにまわって歩いた。木立を伐ってもらった。スパイ容疑の用心のために燃やした方が良いものも燃やした。町会の協力に出なければならないことがあったが、これも自宅町会と幼稚園のある町会と両方をこなさなければならなかった。

戦争に入ると、保育は、朝、皇居の方に向かって遥拝してから幼児礼拝を行なった。礼拝の時に「平和」という言葉が入ると特別高等警察から叱られた。特高からは保育の内容を見に私服刑事が毎日来た頃もあれば3日に1度位だった頃もあるが、保育室の中に入って保育を見た。スパイの疑いをかけていたらしくカマをかけて話しかけてきた。保育時間中は「何もお話しできません」といって断った。終わる頃には先方も忙しいらしく帰っていった。それでも、戦争中は誰もが気持が尖っていたからだろう、知人や見学者から「幼稚園に来ると気持が休まる」といわれた時にはうれしかった。

戦争中、子どもたちの弁当の中身が芋蔓になった頃、よいおかずを入れてもらっている子どもがかえって隠して食べるようになった。そこで園児全員の弁当を集めて全部まぜておじやを作って食べさせた。これは暖かいし園児だけではなく家庭からも喜ばれた。

これも戦争中、園児の親に金沢師団の騎兵隊長がおられたので、頼んで馬を見せてもらいに馬場（現在の陸上自衛隊駐屯地）に園児達を連れて出かけた。馬を見せてもらって、その後、全員一室で干し葡萄か何かの入った大きな乾パンを一枚ずつ（先生には別室で同じ物を3枚ずつ）おやつにいただいて本当に嬉しかった。帰り際、兵隊さんたちは各園児の鞆に乾パンを入れて下さって、さらに子どもたちのポケットにも詰め込んで下さった。きっと家に残してきた自分達の子どもを思い出しておられたのだろうと思う。

その他、戦争中の夏休みに一度、1週間、朝食会をしたことがある。園児が30人位集まった。また、これも一回だけだが夏期学校を3、4日午前中だけ行なったことがある。医学生になった卒園男子2名に手伝いを頼み、また園児の母親に食事を作ってもらった。

空襲警報が出ると子どもと一緒に防空壕に入り、警戒警報が出ると子どもを帰した。

児 玉 衣 子

戦時託児所の併設

1944（昭和19）年頃だったか、幼稚園に託児所の併設命令が出て併設した。補助は一切無かった。幼稚園の保育後に行なった。来たのは小人数だったが2歳未満の子も来た。保育料を少し高く取ったが、子どもを預けなければならない親からは感謝された。親からは時には物納があり、それも助かった。

その他

戦争中には男性は赤紙で兵隊に徴集されたが、それ以外に白紙（シロガミ）といって家庭にいる未婚の若い女性や赤紙徴集されていない男性にも徴集がかけられた。牧師は宣撫班（せんぶはん）といって銃後での植民地への宣伝活動に徴集された（シロガミで）。川上幼稚園には第二高等女学校5年生5,6人が学徒奉仕団として来た。

園児が疎開して減少していくと自分の給料も減らしていったが、とうとう用務員の小父さんの給料も払えなくなって他所へ行ってもらった。

1945（昭和20）年8月14日夜、避難命令が出て近所の人々も皆、犀川上流や下流に逃げた。家には鍋に水をはって置いた。翌8月15日、天皇の詔勅（終戦宣言）が出ても義父には理解できなかったようで、義父から東京の大本営宛てに「もっと戦え」という電報を打つようにと頼まれて電報文をもって外へ出た。自分自身は終戦にほっとして、適当な時間の後帰宅したが、その時の森閑とした外の様子は忘れられない。

2、松本 ^{テル}光さん 志木幼稚園園長

1914年生 現在、京都市西京区在住。

採話：2000年8月19日

父は川村花菱。坪内逍遙の門下生で劇作家。新派の劇台本は現在も松竹に多数保存されている。父の仕事の関係で新派の女優達がよく川村家を訪れていたという。母の実家が金沢で、子どもは年子で女兒3人だったため、長女と3女の光子さんが金沢の母の実家に預けられた。ご両親はよく金沢に来られた。瓢箪町小学校に入学、卒業。北陸女学校入学、卒業。

北陸女学校は、当時、中沢校長でいい校長先生だった。運動部に入って生徒5,6名で運動部の活動を行なった。いわゆるお転婆だった。特に覚えているのはスキーで、東京の父上はスキーをしたいという光さんの希望を聞きいれてスキー道具を買って下さったが、金沢では学校でも颯爽をかった。理由は、女が股を開いて運動をするとは、というもの。立山へ行ってスキーをした。女学校時代に白銀教会に通うようになった。同園の園児たちを外から見るのがあったが、男児は袴をはき行儀がよかった。

東洋英和女学院時代

1931（昭和6）年3月、女学校卒業。4月、東洋英和女学院幼稚園師範科に入学。東洋英和に行ったのは親元に帰りたいかったから。学校の場所は三河台から横丁へ入ったところで、当時、屋敷町だったという。この当時はまだ全部女学院内で授業を受けたという。この学年の入学生は18名だが、卒業は15名だった（名簿には16名になっているが）。

卒業する時、ライザー先生が東京に来られて北陸女学校附属幼稚園への就職を勧めて下さり、父上に相談。すると「学校の先生が来て下さるとは1年でもお勤めしなければならない」といわれて、決断した。

北陸女学校附属第二幼稚園（現在の高岡市、坂の下保育園）

勤務は高岡市の附属第二幼稚園。園長はライザー先生。同僚に大山牧師夫人とくさん（頌栄出身）がおられた。当時の幼稚園の礼拝は週一回で、全園児が集まって行なった。礼拝のお話しは、聖書の中の子どもが感動する話、童話、素話など。絵本は用いなかった。話し方としては子どもから「ああそうか」という声が出て、こちらが「そうだよねえ」と相槌の打てる話し方を心がけてきた。

毎週土曜日の午後は、ライザー先生の指導で、附属幼稚園2園の教師研修会を行っていた。この内容は、次週の礼拝のお話しのけいこ（前もって自分で作っておいたお話しを実際に語って、ライザー先生に批評、指導をしてもらう。当番制で行なった）や教材研究だった。

幼稚園で働いていて未婚だったある時、東京の家で母親と新派の女優さんたちが世間話に光子先生を話題にしているのを耳にした。「光子お嬢様はどうして結婚なさらないの？」「あの子は幼稚園気ちがいのキリスト教気ちがいでね……」。ご自分でも「幼稚園気ちがいのキリスト教気ちがい」で一心不乱に人生を歩んできたといわれる。

後になるが、中年になった高岡の幼稚園の卒業生たちが、幼稚園時代を「おんもしろかったよなあ！」と伝えてくれた。子どもたちが幸せで楽しいことを心がけて、ずっと保育をしてきた。

高岡で1,2年勤務の後、退職。馬場幼稚園に勤務。「今と同じことをしていましたよ」との由。また、石動青葉幼稚園（現在は保育園）にも勤められた。

先生はその後も保育を続けられて、1965（昭和40）年には埼玉県志木市に私立志木幼稚園を新設された。幼稚園設立を積極的に応援されていた夫君松本一郎氏が開園直前に急逝されたため、初代園長を夫君の叔父である松本卓夫氏（青山学院で新約神学を講じられた。当時、静岡英和女学院院長）に依頼された。しかし、その後はご自分が園長として、地域の幼児教育、園長教育、教師研修に邁進され、地域、県のみならず関東において、幼稚園にこの人ありと知られていた。

志木幼稚園は周囲を道路に囲まれて、一方は道端が小高い桜並木の堤防道でその向こうは川なので広く開けて明るい。園全体の周囲が低い白い木の柵に囲まれた、幼稚園のイメージをそのまま現実にしたような幼稚園である。園庭の木は36種。自生の芽が育った大木もある。園長は一本一本全部その育ちをご存知である。園庭の土は、子どもが遊びやすいように2,3年に一度、トラックで

児 玉 衣 子

買い入れておられる。お伺いした時、庭の土の遊びやすそうな様子を筆者は心を惹かれて伺ったところ、そういう返事だった。隣の小公園は、幼稚園が先にできたので市が空地を公園にしてくれたのだという。道を隔てて流れる川の河川敷も、当初はゴミ捨て場にされていて不衛生なので、市とかけあって取りやめさせたのだという。何も無い土地に一から作っていかれたご苦労は、想像を超えるものだっただろう。

室内の棚類は、子どもによい高さだが、全部、当時年配だったタンス職人の作で、玩具を入れるのによい大きさの引き出しがずらりとあるしっかりしたものである。遊び道具も、最初の3年間ほどの間、上野の玩具問屋に顔を知られるほど通って揃えたものだという。それらが皆、よく使い込まれた艶を放ち、角が取れている。父兄の製作による木のはめ込みパズルもある。

今の時代にも、川沿いの桜並木の道を2キロほど、親子で手をつないで通うことを大事にされた幼稚園だったが、本当に惜しいことに2001年3月に閉園された。閉園に際しては1999年から2000年度をもって閉園することを公告され、募集を取りやめられたにもかかわらず、在園児および卒園児家庭の是非にという声に押されて、最後の年の2000年においても、年少（3才児）組から園児が在園した。1年だけでも行かせたいという希望が非常に多かったのである。

3、三村^{シノエ}皖江さん 前桜木幼稚園園長

1911年生。現在、金沢市平和町にご在住。

採話：2001年5月22日

三村先生は1911年、上海生まれ。1歳の時、広島へ。8歳の時、父の死により母の郷里である金沢に來られた。寺町に住み、野町教会日曜学校の生徒だった。

北陸女学校入学。当時、中沢校長、ライザー先生他4、5名の外国人教師がいた。当時の校舎は現知事公舎の前の建物（現市役所南分室）だった。

18歳で卒業後、青山学院神学部に入學。当時、青山神学部はもちろん東洋英和も受洗者でなければ入学できなかった。だから宣教師は保育者志望の生徒を東洋英和に送るために受洗させた。

青山学院神学部は男子は6年制、女子は3年制だった。また、日本で唯一の男女共学だった。学生が一人の人格として扱われたのが非常に印象に残っている（それまでは先生対生徒という枠が強かった）。当時の教授陣には新約神学—松本卓夫、旧約神学—渡辺善太、宗教文化史—比屋根安定、児童文学と児童心理学—高崎能樹、倫理—木村米太郎、社会学—木村マツヨ等、錚々たるメンバーが揃っていた。また東洋英和から非常勤で來られた長野先生？にゲームを習った。

卒業後、長野市のあがた教会附属あさひ幼稚園に6年勤務。婦人宣教師が園長と一緒に家庭訪問を熱心にした。家庭訪問でしたことは各家庭で聖書を読んで祈ることだった。

結婚して、ご主人（牧師）が広島市の教会に赴任。山口に疎開した後、広島に原爆、元いた教会は焼け落ちた。自分達は原爆を免れたが、後に入られた牧師一家はなくなられた。

終戦後、ご主人が呉で亡くなり、そのため昭和23年に金沢に子どもを連れて戻り、昭和24年から母教会である野町教会の附属野町幼稚園に勤務した。幼稚園教諭の免許は、旧制専門学校を卒業していたので、戦後、一級免許をすぐもらえた。

野町幼稚園は野町、ひだ家具（現在なくなり広告塔だけ残っている）の隣の場所で2年保育。各年2クラスずつあり、園児120名だった。勤務当時、ベビーブームで申し込みが殺到し、冬、父兄は朝5時半から行列を作り定員の2倍以上が申し込んだ。そのためくじ引きにしたが、うらまれたりした。入れなかった子は保育所へ行った。礼拝堂を保育室にしたので、毎週末にいす（ベンチ）を礼拝用に出して並べ、毎週始め、礼拝後にベンチを隅に積み上げて保育室にするということを保育者はした。

保育の中の礼拝に関して、東洋英和卒業者は伝統的に園全員一緒にする形態だった。それに対して南信子先生は子どもが礼拝したい気持ちになるときを重視して各クラス毎にと唱えられて軋轢が生じたりした。結局、次第に各クラス毎に行なうクラス礼拝形態に移行したが、それは南先生がいわれたからというよりも、キリスト教保育者の修養会などの中で変化していったと思う。でも全員一緒に守った礼拝はプログラムを決めて、全員でリズム活動、ゲームやお話なども楽しむようにした。各クラスで行なう活動には、描画、製作、おやつなどがあった。

保育は午前中で、週に1, 2回お弁当日があり、お弁当日は午後1時頃までだった。遠足は年2回、春は卯辰山、秋は覚えていない。運動会も行なった。桜木に来てからは園庭で、野町時代は場所は覚えていないが出かけていた。

現在地の桜木幼稚園になったのは、婦人宣教師館だった建物を宣教師たちが帰国した後、改築して移転したからである。その時に幼稚園名も変えた。改築費用は借金で、バザーをしてはその収益金で返済した。移転後、子どもたちは野町周辺が多かったのも、先生は朝8時に野町に集合させて住宅地の道を通るようにして桜木幼稚園まで引率して連れてきた。

三村先生のご在任中に教会附属から学校法人に変更したそうである。

4、吉田真知子さん 元本学保育学科教員

1928年生。現在、金沢市ご在住。

採話：2002年11月6日

吉田真知子さんは富山県小矢部市石動のご出身。3歳で石動青葉幼稚園（戦争中に保育園に変更）に入園。これは、長兄（23歳上）が石動教会の教会員だったのでその関係で入園したのだと思う。アームストロング先生が週一度位こられて、子どもの鼻汁をふいて下さったりしたのを覚えている。保育の中身では、「お仕事」といって、縫い取りや織り紙などの手技をしたのを覚えている。また、クリスマスデコレーションを外国人の先生が指導して青年会の人達が作ったのだろうが、日陰の葛（ひかげのかずら）などを用いた実に美しいものだったのを覚えている。教師には、石動教会の小

児 玉 衣 子

山牧師夫人とその娘さん小山良子先生がおられた。自分の卒園の頃に川村光（本稿の松本光さん）先生がこられた。

1941年4月、富山県立石動高等女学校に入学。その年の冬に太平洋戦争開戦。戦争中、英語は敵性語ということで授業がなかった。高等女学校の校庭に三小牛のような人工の三角山があり冬には自由にスキーができるようになっていた。また、その奥には自然林や静かな池があった。しかし、やがてこの三角山も自分達で崩して開墾して畑にした。また、奥の林や池、校庭、テニスコートも全部先生達と開墾してジャガイモ、サツマイモ、かぼちゃなどの畑にした。肥料は自分達の人糞を、肥桶に汲んで担いでいって撒いた。戦争がひどくなる前のことだが、高等女学校の運動会には、毎年、石動青葉幼稚園の園児が参加してかわいらしかった。園児の参加は、毎年、運動会の楽しみの一つにされていた。

戦争が進み、生徒は軍需工場に動員された。一つは戦闘機のガソリン濾過布を生産する工場で学校から比較的遠かった。こちらには進学を希望しない生徒が遣られた。もう一つは煉瓦工場で、これは学校から比較的近く、こちらには進学希望の生徒が遣られた。少しでも学校で勉強できる時には勉強できる体制のためだったと思う。自分は煉瓦工場の方だった。この仕事は、晴天には、朝、生干し煉瓦を外に出し、夕方、また屋内の棚に積むという作業で、煉瓦を運びながら担任の先生が詩や短歌を教えて下さった。数学のような机に向かわないとできない勉強はできなかったが、少しでも学びたい気持ちに短歌や詩が吸い込まれていった。終戦時は17歳。敗戦を信じられなかった。

1948年クリスマスに富山二番町教会の黒澤景文牧師から受洗した。

しばらくして、石動青葉保育園でヘルパーをする内に興味が湧いて講習会を受けて保母試験を受けて資格を取った。

保育短大入学

1949年、キリスト教保育連盟北陸部会が白山公民館で開催されて出席した。この時、講演は前年に金沢に来られた南信子先生だった。鶴来駅を降りて行く道をライザー先生と御一緒になり、その時に「今度、学校ができるからいらっしゃい」と誘われた。その後、二次募集を教会で見てそれで気持ちが動いて願書をだした。試験は面接のみ。ライザー先生は募金活動のために渡米中でおられず、代わってウィン先生が来られていて、面接官はウィン先生、南先生、村上賢三先生だった。開学式は第一次募集生のみで伝説的な学生数8名の式だったようだが、入学式は新入生20数名だった。

短大校舎は現在の「ふるさと偉人館」で1階は第一幼稚園、2階を改築して短大にしたもので、2教室、礼拝室、図書室から成り立っていた。教師陣にはウィン先生、南先生、音楽の安藤先生など。

石動の自宅から汽車通学をしたが、当時、汽車の所用時間だけで40分かかった。冬だけ下本多町の密田先生（後に教養科教授として勤務された）のお宅に下宿をお願いした。既に下宿している2人の友人とともに先生は私たちを可愛がってくださいました。友人達と一緒に炊事をし、広い廊下に七輪を置かせてもらったが火をおこすのが一苦労だった。南先生が学校のストーブにできた消し炭を

下さったので火をおこすのが楽になった。

授業の単位数は大変に多くて、実習を終えた後も3時間授業があり眠くてつらかった。2年になると学生数は16名になり、眠るとすぐわかってしまうので眠れない。でもウィン先生は、眠いことを理解して下さった。

ナースリースクールの草創期

卒業後（1952年）、出町青葉幼稚園に勤務。2年後、短大に附属ナースリースクールを開園するために声がかかり戻った。2回生の島田英子さんと2人だった。開園の責任者は乳幼児教育専門家で米国でのナースリースクール運営経験もありだったウィン先生。日本における大学附属のナースリースクールとしては本邦初である。

ウィン先生は母の会（幹事会）にいろいろ相談をもちかけては決めていかれた。おやつに牛乳とビスケットを出したが、その際にも親に量をたずねて決められた。親の方からは牛乳は半合（90cc）位、ビスケットは食べ過ぎると昼食に差し障るという希望が出されて不二家の小さな丸いビスケット2枚に決めた。牛乳はナースリースクールのために牛乳やさんが小瓶を作ってくれた。

発足時のナースリースクールは2、3歳児対象。定員30名、2歳児はその内三分の一位の人数だった。幼稚園・短大の裏の大きな敷地に2階建て一棟を増築し、廊下でつないだ。その一階がナースリースクール、2階は短大講堂だった。ナースリー発足にあわせてこの建物が建てられた。また、庭もナースリー専用の庭があった。庭には金木犀の大樹があり、その下で遊んだ。「ふるさと偉人館」は建物は変わったが銀杏、萩（紅、白）、柃などの木々が今も第一幼稚園側の面影を残している。

ナースリースクールは毎日行われ、時間は9:00-12:00。保育料は幼稚園の2倍だった。プログラムは第一幼稚園とは全く別だった。プログラムは書いて壁に貼り出した。これはウィン先生の方針で、家庭の方にもプログラムがわかることを大事にされた。一日のプログラムは大体次のようだった。

朝、8:30～9:00 登園。

所持品整理。（一人別子ども用ロッカーは2、3歳児用サイズにした。いすにもロッカーにも一人ずつ別模様のシールを貼った）。別室で目診（医学的な見方で健康状態を診る）。

手洗い、うがいの後、部屋に入ってあそぶ。

～10:00 自由あそび。

ウィン先生は遊具をたくさん用意して、環境構成に心を配られた。小さい方の保育室を「ままごとの部屋」と呼んだが、そこに米国から目の動く等身大の人形を取り寄せて下さった。ままごと道具も当時珍しいベークライト製のものを米国から持って帰って下さった。米国製の玩具のフライパンなどは本物の目玉焼きができるものだった。

人形ベッド、たんす、棚、乳母車は、こちらの家具屋に子どもの大きさに

児 玉 衣 子

合った本物並みのものを製作してもらった。子どもたちが喜んで遊ぶので、教師達でガスレンジを手作りました。

子どもが手を伸ばして取れるような3段の玩具棚を特注した。この棚は現在も第一幼稚園にあると思う。

子どもが興味をもってすぐ遊びに入れるように玩具を床に広げておくことも、絵本を立てて置いておくことも始めた。

絵を描きたい子にはイーゼルを立てて出しておいた。

礼拝で用いた聖画を掛けておいた。

何もしない子がいないように、楽しくすごせるように、気を配った。片づけは、遊びの延長で、いつのまにか片付くというように心がけた。

約15分 用 便 これもプログラムに入れた。(一斉ではなく、子ども個人の生理のリズムを大切にした)

手洗い

集合 子どもたちがトイレに行っている間にピアノの周りに蓑蓑を敷き、それに好きなように座る。幼稚園では椅子を持って移動したが、ウィン先生は日本の風習に合わせることを大事にされた。

約20分 子どもたちがトイレから戻るのを待って、先生は子どもたちの前の真中に座って、礼拝、絵本、お話しなど。

おやつ 牛乳とビスケット(前述)

休息 紺色のマットを注文(紺色は当時貴重な色)、この上に上靴を履いたまま横になった。この間、レコードをかけたり、ウィン先生はピアノがお上手だったので弾き歌いをされたりした。騒ぐ子がいると「皆が静かにしている時に迷惑になるから一人で休みましょう」といって別室でやすませた。これは罰ではなく、一人になるようにさせた。家に帰って「お邪魔の部屋に入れられた」と話した子がいたそうだ。

～11:15 一斉活動

晴天時には外あそび。

外あそび用に平均台のような、棒の幅は一定で長さの異なる棒と、高さもいろいろな高さにその棒をはめ込むことのできる遊具を、ウィン先生が見本を描いて家具屋に注文して作成してもらった。これも現在も第一幼稚園にあると思う。

雨の時は室内でリズム活動。これはピアノに合わせてアップ・ダウン、ギャロップなど(弾かない先生は子どもと一緒に動作)。保育室の中で、動く方向は一定だが動きは自由にした。

その他、粘土あそび、造形活動など。

リズム曲集は、ウィン先生の持ってこられたものが、現在も土台になっていると思う。

11:30～ 降園準備 一斉にさよならはしないで、迎えの来られた子から、手を洗って順番にかえた。

ウィン先生は、常に「ナースリースクールは外の学校です」…外での活動を重視された。計画は、常に静的活動と動的活動とのリズムを配慮して計画を立てた。活動は、大きく室内活動、おやつ、外あそびと3分して行なった。

その他、

- 1、クリスマスにウィン先生は、赤ちゃんイエスさまのお誕生を知らせて子どもが喜ぶ日とされた。近くの知事公舎の松の枝の剪定されたものを用いて、それに米国からの飾りをつけておもちゃ棚を飾った。幼児時代の石動青葉幼稚園の装飾といいウィン先生の装飾といい外国のセンスで今も記憶に残っている。
- 2、クリスマスには子どもたちは自由に遊んで、それを家族に見てもらった。この日にはおやつも特別のものにした。プレゼント交換もした。
- 3、ウィン先生の時代には遠足も運動会もしなかったが、かわりに毎年一回秋に家族の会を行なった。
- 4、卒業証書を出した。この証書をもって金沢大学附属幼稚園へ行くのが、親の希望として多かった。
- 5、ウィン先生は、ご退職にあたり本を上梓された。『雪片（ゆきびら） 滞日の思い出』新教出版社、1957である。現在も本学図書館の開架図書で読むことができる。

開園4年目、吉田真知子先生は、第一幼稚園と兼務された。この時、一学期が済んだ時点で建て替えることになり、第一幼稚園は金沢教会教育館をお借りし、短大は高校で授業をした。1年ほどお借りしたように記憶する。

4年間勤務の後、信州上田市の常田（ときだ）幼稚園に転勤。とても楽しかったという。2年後、再び戻って1960（昭和35）年から3年間ナースリースクールに勤務。番匠鉄雄学長だった。

上田から戻ってみるとナースリースクールは3歳児だけになっていた。この時期、人口増が激しかったのと、親の意識も3歳からという意識が強くなったからかと思われる。また、幼稚園と合同で運動会をするようになっていた。保育料も幼稚園並みになっていた。

愛育会病院から本学へ

吉田先生は、ウィン先生の指導を受けて幼い子たちと関わる内に3歳までの子どもの発達に惹かれて、もっと学びたくなったという。実際に子どものいる所で働きながら学ぶ事を考え、結局、恩賜財団愛育会病院の中の保育室に勤務。この保育室には新生児期をすぎた乳児から各月齢毎の子どもたちが計20名ほど入院していた。それまで看護婦しか世話をする人がいなかったので病院でも歓

児 玉 衣 子

迎された。総婦長、内藤寿七郎院長、宮崎叶医師らに目をかけられ、内藤院長には、医師しか出入りできない医局に自由に出入りして調べものなどできるようにしていただいたという。恵まれた仕事を与えられて子どもが可愛くて可愛くてたまらなかったという。吉田先生は、内藤院長については子どもに診られる時のやさしいやさしい手つきが忘れられないそうである。勤務は、保母資格を持った者が2名いたが、3交代制も看護婦と組んで2人でした。そのような中で医学的なことも学んでいった。多くの赤ちゃんと付き合った。

9年たった1972年4月、「乳児保育」の開講に伴い再び帰ってこられて、以後、1994年まで短大で学生に「乳児保育」「実習指導」などを熱心に教えて下さった。

なお、ナースリースクールの歴史は1954年5月から1979年3月までである。

5、森 正栄さん 元北陸学院短期大学附属彦三幼稚園主任および第二幼稚園主任

1935年生 現在、金沢市在住。本学同窓会会長。(旧姓 内野)

採話：2002年11月13日

幼児期

正栄さんは金沢市、旧穴水町（現在の玉川図書館の西の地域）にあった母方の祖父宅に父の死後同居して成長された。祖父は、赤座織物という輸出用羽二重織物工場を現在の芳斉1丁目で経営。白銀幼稚園（当時、高桑園長）の一年保育に通った。幼稚園で習った「シャボン玉」のお遊戯は今でも覚えている、礼拝も記憶にあるという。

当時、十四番館（カナダ系婦人宣教師館）で料理教室を開いていて、叔母が習いに行って作ってくれた料理がおいしかった。祖父の工場には寮があり、男衆や女工さんのためのまかないも家族の食事も同一で、食事と一緒にこなっていた。それは土地の魚野菜が主で、魚の煮汁でねぎを煮たのは子ども心に嫌いだった。でも、幼稚園では、普段は週何度かはお弁当なのだが、たまに給食がありチキンライスがおいしくて嬉しかった。また、桃のコンポートもおいしくて大好きだった。

近所に幼稚園仲間が3人いて誘い合わせて幼稚園へ通った。帰山先生は現在のメルパルクの辺りにお住まいだったので、朝「帰山先生、幼稚園いきましょ」と先生も誘った。一緒に行ったこともあればお母様が「もう行きましたよ」とおっしゃることもあった。

幼稚園の遠足では、金石にあった湧々園（遊園地）に行った。現在の六枚町交差点先のJR高架の少し先あたりに金石行きの電車の始発駅があり、金石街道の線路沿いは松並木だった。遊園地自体の思い出は覚えていなくて、高桑園長先生が電車の外から園児達に「窓の外に手をださないように」と注意してまわられたのだけ覚えてる。

北陸学院保育短期大学時代

1953年4月入学。クラスメートには個性的な方が多かった。小川和子さん（前北陸学院小学校校

長)、斉藤千代さん(梅光保育園園長)も同期。入学時29名。卒業25名。1～4回生迄は小学校教諭二級普通免許が取得できた。クラスはまとまりよく、活発で、冬の燃料費値上げが通告されたときには団結して反対した事もある。(先生から説明を受け納得)。ライザー学長は熱い信仰によって慈愛深く厳格で、律義、礼儀正しいなど、外国人というよりも金沢の人情に近い人だった。前の賛美歌に「神の人よ」(#213)という賛美歌があるが、あの歌が思い浮かぶ方だと思っていた。

ウィン先生は自分たちが1年生の5月に日本に戻ってこられた。日本語がお上手で薔薇色の洋服を着られて、朗らかでウイットが豊かで、アメリカ人というイメージのままの先生だった。ウィン先生の英語授業の思い出では、ある時、授業日が映画「ロミオとジュリエット」の最終日になってしまった。必死になって先生に「行かせて下さい」と頼んだら笑って許して下さった。その次の授業日、授業は有名な「バルコニーの場面」のテキストが用意され、読むだけではなく身振りをもつける演劇だった。先生が率先して身振りも交えてして下さい。この4回生のクラスは卒業生を送る会や南信子先生をアメリカ留学に送る会ではクラス全体で劇を作って演じた。ウィン先生の礼拝では、今も学校に残っている赤い表紙の英語の賛美歌を用いた。

きかん4回生で知られたが、クラス中仲がよく、昼食は全員でストーブを囲んで食事をした。また、クラス愛唱歌は当時の賛美歌#288「たえなるみちしるべの光よ」だった。

卒業式の翌日、謝恩会を学校で行ない、去りがたくてさらにその晩学校に一夜して別れた。

附属幼稚園勤務

1955年4月 北陸学院保育短期大学附属彦三幼稚園教諭として就任。以降、13年間勤務。

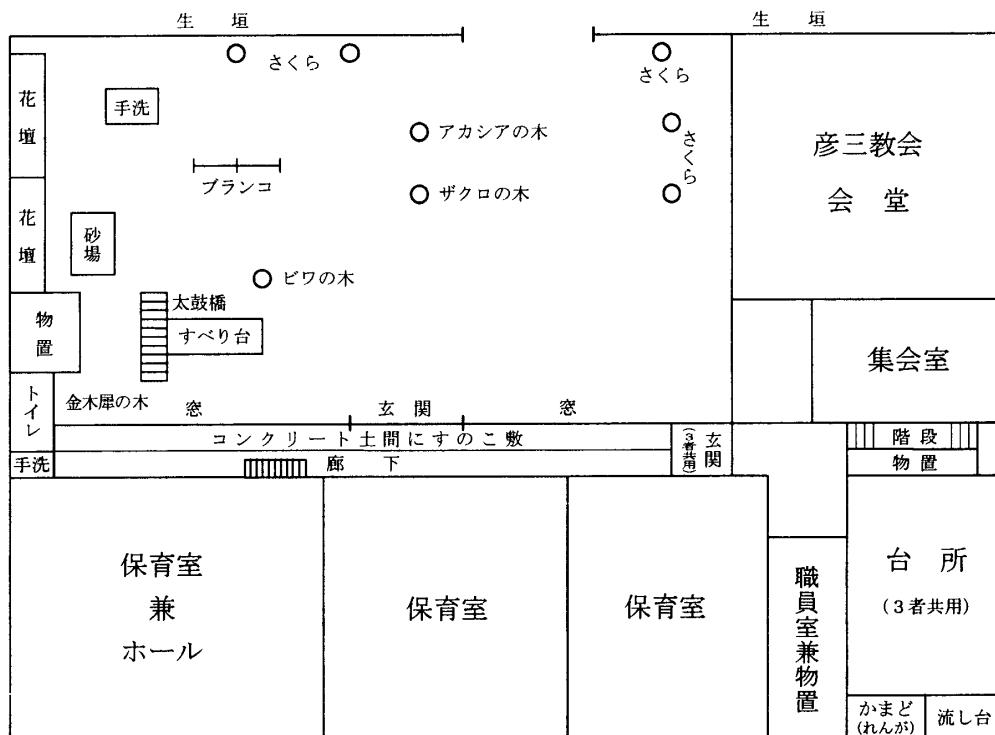
ご結婚により退職(当時、結婚退職は不文律だった)。専業主婦5年間の後、1974年4月から再び彦三幼稚園に6年間勤務。

彦三幼稚園(1954.4-1992.3)は、殿町教会の移転に際し殿町幼稚園を北陸学院が引き継いだものである。彦三町に土地購入の際、敷地内に木工場の建物がまだ残っていたのを二分して改修し幼稚園と教会に転用したもので長細い建物の1階と2階の一部。2階の残りの部分は北陸栄養専門学校の寮になっていた。当時、第一幼稚園および第二幼稚園の園長はライザー先生だったが、彦三幼稚園については最初から番匠先生が園長を兼任された。主任には、殿町幼稚園主任の三浦先生(中島明美現若草幼稚園主任の母、この後若草幼稚園園長)を迎え、堀芳子(現姓、大杉)さんがピアノに入られた。内野(現姓 森)さんの就職とすれ違いに三浦主任は若草幼稚園園長になられ堀さんも一緒に転出。主任に市田先生、あとは1年先輩の佐野さんと新人の内野さんになった。

クラス構成は、既に1年間の保育を経験した5歳児1クラス(26,7名)、5歳児新入園の1年保育クラス(20名)、4歳児新入園の2年保育クラス(27,8名)という3クラスであった。

教会と幼稚園などの概略の見取り図は次のようなものだった。

児 玉 衣 子



2階は、台所の上の一部屋が保育室。あとは栄養専門学校寮で行き来しない構造。

保育について

8:30-9:00 自分の部屋で自由あそび

その後 あつまり、挨拶、お話し、礼拝、話し合い
ホールへ

お弁当は週2回。後には週3回。おやつは毎日10時頃に牛乳のみ。卯辰山下常盤町に油谷牛乳の牧場があった。100ccほどの瓶入りだった。

行事関係では、在学中に倫理の授業を受けた美大教授天川先生のお嬢さんが在園しクリスマスの聖劇にマリアさんをする事になり、天川先生は大変に喜ばれて、学生を連れて2晩ほど徹夜をして3.6m程の大きなベニヤ板で馬小屋の背景やロバなどを製作して下さった。おかげさまでそれらをその後毎年使用した。また、遠足には北鉄バスで卯辰山の油谷牧場、辰巳の浄水場公園、羽咋近くなどに行った事が記憶に残っている。ポータブル蓄音機を持って行ってゲームをしたり、羽咋近くの松林では松ぼっくりを拾ったりした。年2回。いつも晴天にめぐまれた。(記録はウイン幼稚園に残っていると思う)。

また、番匠先生が発案されて父の会を開いたことがある。夜、礼拝を番匠先生が行なわれ、南先生がお話し、あと地域の話などをするお茶の会で20数名が集まった。市田主任は国内留学で普段は不在だったが、この時には初めての事なので出席された。

彦三町は尾張町の商家の後方にある閑静な住宅地で浄土真宗の根づいている古い土地柄なので、番匠先生は地域に密着した地域のための幼稚園を目指された。市田主任は母の会に協力的でクリスマスには母の会がページェントをしたこともある。また、栄養専門学校の石原先生は月に1, 2回

母の会のために料理教室を開いて下さった。幼稚園バザーにはお多福のうどんや地元のすしやが入ってサービスして下さった。父兄も協力的で和やかな交りがあった。

市田主任が東京へ行くために辞められた後、南先生が第一・第二幼稚園と同じく主事になられた時から、それまで日曜日を登園日にして月曜日を休園日になっていたのを、保護者の希望もあり、日曜休園にして月曜日から登園にした。同時に、子どもが教会学校へ行くのは自由にして、教師もまた自分の所属教会へ行ってよいことになった。また、教師会を月2回、短大2階の南先生執務室で行なう事もこの時から確立した。

1966年の10月末、番匠先生が「今から三小牛へ行く」といわれて、幼稚園の先生たちも大喜びで一緒に連れていってもらった。見渡すかぎり草原だった。

市田主任のあと、佐野（現姓 吉田）さんが主任、その後、内野（現姓 森）さんが主任を務められた（この時代のことを森さんは『花の蕾のひらくとき』博文堂、2000. に書かれている）。

5年後

南先生から声がかかって再び4月から彦三幼稚園に勤務。最初の7ヵ月はヘルパーとして午前中のみ勤めた。当時、本学中学および高校の組合の力が強かった時で、彦三幼稚園でもその時の主任および先生2人が組合員だったので、夏休みまでの時期に組合のストライキで職場放棄が一回だけ行われたことがあった。その内の一人の先生が1学期終了後に退職、主任も10月に結婚退職、年度途中で2名退職の事態になり、森さんが主任を引き受け、内山さん（現、愛香南部幼稚園長）と中村さん（現、大徳保育園高島さん）とが手伝われた。そうすると、保護者の気質も変化しており、保育方針を再度聴き質するという姿勢で不信感を顕わにして臨んでこられた。これに対して森さんは学院および幼稚園の保育方針と目標は人が変わっても何ら変更の無い事を話して納得してもらった。その保護者は卒園式の後、謝ってこられた。翌年、新卒の瀬戸さん（現、附属幼出村先生）と綱さん（現、橋本さん）が就職。二年後新卒の森田さん（現、岡田さん）が就職。

第二幼稚園におられた佐々波先生の馬場幼稚園園長就任に伴ない、森さんは第二幼稚園と彦三幼稚園と両方の主任を兼務するようになった。クラス担任はしなかった。

この時期、1976年から第二幼稚園に梅光児童園の年中児を受け入れ始めた。1977年には落成式を終えて間もないライザー記念館でお泊り保育を行なった。また、第二幼稚園ではクリスマスの時、



彦三幼稚園のクリスマス



児 玉 衣 子

子どもたちはマントルピースを背にしてサークル状に座り、保護者はその背後に大通り側を背にする形で行なった。最後の年にクラス担任をした卒園式の後のお別れ会が印象に残っている。子どもたちは、けんかも寝るのも自分達で解決して行くといった活気のある子たちだったが、1年間の思い出を自然観察もお泊り保育も大きな絵に描いて、歌も楽器も挿入して大きな絵話のようにして、舞台を作り上げた。

北陸地方のキリスト教保育史 —JKU年報から—

Kindergarten Union of Japan (通称 JKU) は、1906 (明治39) 年、神戸市の頌栄幼稚園および頌栄保母伝習所を開設、運営していた Miss Annie Lion Howe の呼びかけによって、当時、わが国の中でキリスト教諸教派宣教団体によって格別の連携もなく行われていた保育の関係者が相集まって作った団体である。JKU は毎年夏、軽井沢で研修と一年の活動報告を行なった。その記録は1907年から毎年、年報として出されたが、単なる報告だけではなく各地の園および保育の写真が添えられており、今日、貴重な記録になっている。

さらに JKU は、1907年には米国に本部のあった International Kindertenn Union (IKU、万国幼稚園連盟) の名誉会員に推され、JKU の活動および年報は、そちらにも報告された。つまり日本人は知らなかったが、日本における保育活動は、JKU を通して海外にも知られていったのである。

JKU は、1940年7月、わが国が国策により外国人を帰国させた時期に、その10年ほど前からできていた日本人の団体である基督教保育連盟に後事を託してその働きを終えた。しかし、ミス ハウが神戸に頌栄幼稚園および保母伝習所を開設して以来、海外からの伝道の最前線という使命のもとに普及されたとはいえ、婦人宣教師・幼児教育者たちの行なったキリスト教保育は、彼女たちの働いた地域でわが国の保育および子育てに対して影響を与えた。しかし、それらも現在では歴史の中に埋もれて、私たち自身、現在の保育のあり方や考え方に慣れてしまって、最初から現在の通りに出来上がっていたような気がしたりしている。

けれども、伝統も文化も異なる外国の土地にきた婦人キリスト教保育者たちは、その地に合った保育を作り出そうとし、同時に自分たちの有している優れた知識や技術を分かち与えた。その、さまざまな混交や融合の実りの上に、現在のこの地の保育が存在する。この意味で、ミッシヨナリーから派遣された古い時代のキリスト教保育者たちの記録を紐解いておくことは、後の時代に保育をすすめる私たちのひとつの責任でもあるだろう。このような考えのもとに、JKU 年報に記録されている北陸地方のキリスト教保育の幼稚園、保育園の記録をここに訳出する。本稿では第1号 (1907年8月、各園の内容は1906年—1907年の記録) から第5号 (1911年8月) までの記録を取り扱う。

第1号(1907、明治40年)には神戸、広島、長崎、京都、名古屋、山口、長野、上田、東京、静岡等の各地の幼稚園が紹介されているが、北陸地方の幼稚園はどこも掲載されていない。これは、北陸地方の幼稚園がまだ知られていないということであって第1回会合には出席者もない。

しかし、京都市の Marguerite Ayres 幼稚園の項に、この幼稚園の設立は Mrs. J. B. Porter of the Presbyterian Mission in 1893 と記載され(10頁)、さらに同じミッシヨナリーの設立している西陣幼稚園(1901年創立)には、北陸女学校卒業のシオさんという女性が保母として勤務していることが紹介されている(19頁)。マルガリテ アイリス幼稚園設立者のポートル夫人は本学附属第一幼稚園設立者のミス ポートルの兄 J. B. Porter 牧師の妻である。ポートル牧師はウィン牧師と共にミス ヘッセルを助けて金沢女学校創設に関わった人である。西陣幼稚園に北陸女学校の卒業生が勤務していたのは、多分、そのような縁があったからだろう。

第2号(1908、明治41年)から、現在の本学附属第一幼稚園に関する記述が出てくる。各教派による報告の中の Presbyterian Mission North の報告の項に、Kanazawa Kindergarten(1886)と報告されている。現在の責任者は Mrs. G. W. Fulton、定員60名だがニーズは大きく入園待ちも多い。希望が多いので70名にしなければならず、そうするともうひとつクラスと先生とが必要になる、と報告されている(21頁)。しかし、執筆者はフルトン夫人ではなく京都の G. S. Bigelow である(22頁)。

この記事の前々頁には、金沢、英和幼稚園の、多分、卒園証書をもった子どもたち14名と在園児56名、それに日本人の先生5名と外国人女性(ミセスフルトンか ジャネット ジョンストンか不明)とが勢揃いして園庭で木立を背景に撮った整列写真が添えられている。

また、この巻末の幼稚園リストの先頭に1886年創立、所在地：金沢、ミッションは northern Presbyterian と記載されているものの名称欄に線が引かれているのは、名称が明らかではなかったことを示している。しかし、この巻から加賀、金沢に北部メソジスト教派による幼稚園が存在していることが明らかにされたわけである。

第3号(1909、明治42年)

ようやく英和幼稚園の当事者からの報告が出てくる。執筆者はミス ジョンストンである。
American Presbyterian, North. 1885.

英和幼稚園、金沢(12頁)

私たちの幼稚園にはとてもいい年だった。定員70名なのだが、それだけの人数が来ており、もっとたくさん来たかもしれない。カノさんは、彼女が京都へ発たなければならない1月まで幼稚園に勤務した。M. タカタさんが現在勤務している。また、彼女は頌栄保母伝習所の卒業生でもある。

園長はフルトン夫人である。彼女はこの2年近く不在であるが、3月末に戻ってくる予定である。

私たちは2週間毎に開かれる母の会で幼稚園とつながりをもっている。この会合は出席率はかなり良いのだが、内容については、フルトン夫人の不在、家庭訪問をしたいとの要求などによって、

児 玉 衣 子

最近、評判が落ちてきている。

幼稚園には5名の教師がいる。全員、誠実なクリスチャンであって、仕事にも大変熱心である。

今年、私たちは学校の創立25周年と、この25年間に学校がすばらしく成長したことを祝うことになっている。 Janet M. Johnstone (校長代理)

また、この巻から北陸地方にある他教派の幼稚園についても報告が始められている。

Methodist Church of Canada, 1897. (カナダメソジスト派) から次の3園の報告がされている (33頁)。

Bata(原本のまま) and Kawakami Kindergartens, Kanazawa (金沢、馬場幼稚園、川上幼稚園)

馬場幼稚園および川上幼稚園は、それらのある地域の子どもたちにより働きをしている。これらの幼稚園は、当初、無料だったが、現在は月謝を取っている。

C. E. Hart

Toyama Kindergarten (富山幼稚園、富山)

この幼稚園には、富山でも最良家庭の子どもたちが来ている。

C. E. Hart

しかし、巻末の幼稚園リストに掲載されたのは、北陸地方では金沢の英和幼稚園だけであって、馬場幼稚園、川上幼稚園、富山幼稚園はまだ出ていない。

第4号 (1910、明治43年)

幼稚園報告の冒頭に米国北部プレスビテリアン派が報告し、その最初を金沢、英和幼稚園が行なっている。

この一年、園児の平均出席は50人である。軍人家庭から来ている子どもたちが多いので入れ替わりも多い。

主任の Miss M. Takata は、ミス ハウの保母養成所の卒業生であり、また、私たちの女学校の卒業生でもある。アシスタントの教師達は、全員、私たちの女学校の卒業生なので、心安く一緒に働いている。皆、大変熱心な働き手である。

幼稚園とつながって私たちは月2回、母の会を開いており、出席はかなりよい。また、幼稚園舎で日曜学校も開いており、たくさんの子どもたちが通ってくる。私たちは幼稚園卒業生のためにもっといろいろしたいのだが、まだあまりできていない。

フルトン夫人は、もう何年もこの幼稚園の園長だったのだが、大阪へ行かれて、この名誉ある仕事は私にまわってきた。

Janet M. Johnstone

カナダメソジスト教会派の報告には、この巻から、福井、栄冠幼稚園が報告される (53-54頁)。写真も掲載されている。背後に竹藪なども見える戸外で、子ども17名、日本人は年配の女性、おそらく教師の女性、アシスタントのような感じの女性の3名、それにミス ヘニガーである。

1910年4月6日、私たちは福井、栄冠幼稚園を開園した。定員20名にしたが、それに見合うだけの申し込みを受けて喜びだった。

この3ヶ月半の間、平均出席数は17名である。現在のところ、私たちは教会の会堂を使用している。これは、丁度いい大きさの西洋館であって、その主な部分は集会や食事のためのすばらしい部屋になっている。また、教会堂の使用によって、幼稚園は最初からキリスト教の教育機関と認識された。教師のナカジマさんは官立の学校で学び、その後、私たちの教派の信州、上田の保母養成所で一カ月の研修を受けた。彼女自身、誠実なクリスチャンである。私たちは、月一回母の会を開き、12名の出席があった。私たちは、この幼稚園の開始が成功以外の何物でもないことを願い、また、この町において、大切なことを隅々にまで届けて、いい影響を及ぼしていくことを願っている。

May H. Hennigar

第5号(1911、明治44年)

この巻では、幼稚園における各種活動について報告がされている。その中の Hahanokwai (母の会) 活動に関する報告の中に、福井、栄冠幼稚園の活動があげられている。次のような内容である(23頁)。なお、記録者は掲載されていない。

秋田、ミッチェル幼稚園と福井、栄冠幼稚園では、談話に加えて外国の料理や縫物が大変有益であることがわかった。Miss Correll によれば、それらは会合をより打ちとけたものにして母親達は西洋館によりなじむ。その結果、母親達はのびのびとし始め、‘遊ぶ’ようになる。それに、このような手仕事は、会合を開く際、遅刻の気まずさを前もって取り除くし、遅刻した母親があっても、それによって大きく中断されない。さらに良いことには、大抵の母親は会合の中のこの部分を大変に心に留めているので、その部分を受け損じないようにと早く来る。そういうわけで、話が始まる時には全員が揃っている。月額が決まった会費は徴収していないが献金は行なっている。その中から料理の費用を支払っている。そして、その収支決算の剰余金から贈り物(恩物かもしれない。原文は gifts. 訳者註)が贈られた。(以下、他園レポート)

22頁には 富山幼稚園の写真が掲載されている。

24頁には、英和幼稚園の25周年祭が写真とともに掲載されている。

我々の同盟の最古の幼稚園である金沢、英和幼稚園では、今年、クリスマス週間に25周年記念を祝った。ミス ジョNSTONによれば、午前中に園友や教育関係者を招待した公式の式典が行なわれた。ダンロップ牧師が子どもたちに特別なお話しをした。午後には卒園生のために祝賀会をもった。この子どもたちにはフルトン牧師がお話しをした。

児 玉 衣 子

第5巻の巻末の幼稚園リストにおいて、初めて北陸地方の幼稚園の詳細が明らかになる。

創立	所在地	園名	Mission	園長	主任	資格の有無	出身校	園児数
1885 ※	金沢	Eiwa (英和)	American Presby- terian	Miss J. M. John- stone	Miss Naito	有	頌栄	70
1910	富山	Seikwa	do	Miss K. A. Gibbon	Miss Tokuda	有	広島	—
1910	福井	Eikwan (栄冠)	Canadian Methodist	Mrs. Henniger	Miss Nakajima	有	東京伝 習所	36
1911	福井	Biko (美光)	American Presby terian	Miss Takata	Miss Takata	有	頌栄	25

以上が、第1号から第5号までに掲載された北陸地方の記録である。

※金沢、英和幼稚園創設は、実際には1886年である。